板野中学校　同和教育だより

MY SKY No.21

マイ・スカイ

2001年２月20日(毎月第１・第３火曜日きまぐれ)発行

発行者
編集・文責
顧吉成正士
顧次本知己

「宇和島水産高校・えひめ丸」なんとも腹の立つ事故です。徳島県にもある日和佐水産高校に大切な板中卒業生が行っていたので，他人事のようには思えません。

それにしても，アメリカ政府の対応，日本政府の対応，どちらも本当に人間を人間として，国民を国民として思っているのだろうか？と疑問に思いました。もし板中生が他校生とトラブルになり，それが人命に関わるようなことがあれば，板中の教員はすっ飛んでいくんじゃないかなぁと思えるのです。だからこそ，余計に歯がゆく，悔しい思いがします‥‥。

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

◇2年生全体学習(2月23日)1年生全体学習(2月28日・3月1日)楽しく！真剣に！

タイトルにあるように，２年生，１年生の順で全体学習が行われます。まず２年生では，「つらいこと　あるねんな」を学習することになっています。どうぞ読んでみてください。

つらいこと　あるねんな

かなちゃんは，クラスで　一ばん力がつよく，だれでも　すぐ　なかしてしまいます。なにかいいかえすと，

「おまえら，あとで　おぼえとけよ！」

と，大ごえで　どなります。

かなちゃんの　そばには，だれも　ともだちになってやろう　という子は　いません。おわりのかいや，がっきゅうかいでも，だれも，かなちゃんのことは　いいません。

ある日，まさるくんは，がっこうを　やすみました。先生が　いえを　たずねて，かなちゃんに　いじめられたことがわかりました。まさるくんは，「まさる　さるさるさるの　よわむし。」と，いわれたのでした。

おわりのかいでした。まさるくんは，きのよわい子です。先生も　みんなも，まさるくんを　はげましました。

「まさるくん，がんばって　いおうね。」

「まさるくん，しっかり　いいや。」

まさるくんは，ようやく　かなちゃんにいじめられたことを　話しました。

すると，かなちゃんは，

「わたし，そんなことを　いってません！

と，大ごえで　さけびました。みんな　しーんと，だまってしまいました。

さあ，どちらがほんとうか，わかりません。すると，二，三人の子が　まさるくんのいじめられているのを　見ていて，そのときのことを　話してくれました。

「かなちゃん，うそつきや。」「うそつきや。」

と　いう声が，あちこちから　あがりました。

みんなは，いままで　かなちゃんに　されたことを　いいだしました。かなちゃんは，とうとう　なきだしてしまいました。

そのときでした。おなじはんの　さよちゃんが，立ちあがって　いいました。

……つづく

とまあ，こういう資料なのですが，さて，この続きはどうなったでしょうか？２年生のみなさんは知ってますよね！１・３年生のみなさんは想像してみてください。お家の方々も，よかったら是非，一緒に考えてみてください！

１年生では，八ッ塚実さんの資料を使うようです。八ッ塚さんは，ちょうど３年くらい前に亡くなった広島県の元中学校の教員です。いろんな問題に取り組んできた，味のある方です。その一端が知れる文章を紹介したいと思います。

福山市の八ッ塚実さんは，30年間，中学校で理科を教えてきた。久美子夫人も教師。家には三人の子供と実さんの母親。88歳で家事もしていた元気な母親だが，ある日に脳こうそくで倒れる。

「闇を切り／ひた走り行く／救急の／車に乗れば／声もうせたり」

非常事態だ。だれが面倒をみるか。まず久美子さんが二ヶ月の看護欠勤制度を利用，病院に通った。ついで実さんも二ヶ月。この制度を利用するのがほとんど女性ばかり，ということに驚いた。介護のような仕事は女性のものと考えていたことを実さんは反省する。

「人間学」と称し，独自の教材で生徒の啓発に熱心だった実さんだ。胎児性水俣病の子の写真，102歳の人が作った人形‥‥。それらを前に，よく，人間の生き方を語った母親は，やがて病院から家に帰る。よくなったわけではない。看護欠勤も期限切れだ。夫婦で話し合う。実さんが看護に専心，と決めた。

仕事から去る日，生徒たちに，静かに，別れの言葉を告げた。「人間，生涯に一度くらいは，自分の一番やりたいことを，やめなくてはならないこともある」‥‥体育館の中が，さざ波のような泣き声に満ちた。

実さんの介護の日々が始まる。考えさせられた。家事でも，介護でも，女性の負担がいかに大変なことか。

「あれほどに／嫌々でありし／排泄も／清しと思う／今日このごろは」

汚いものを汚いと思わなくなる修業。入浴させる時は，家族全員が手伝う。母親は喜んだ。人間にとって何が本当に大切なことか。実さんは，学校で何を教えていたか，と思う。世話ができることを感謝しながらの毎日が，勉強だ。

「その昔／抱かれし母を／今は抱き／陽なたの窓に／春を見せたり」

実さんの母親は，生みの親ではなく育ての親だ。家族の気持ちの交流。介護の真剣な協力。そこに，人間がともに生きることのありがたさがあった。母親は亡くなった。

『一生一度の学び』(八ッ塚実著)に貴重な体験が語られている。　　朝日新聞「天声人語」

この八ッ塚さんの資料です。しっかり読み込んで，学習に活かしてください。

１年生も２年生も，しっかり手に，心に汗をかいて，発表する勇気をだし，精一杯頑張れた自分をほめてみましょう！一人で挙げる手は恐いかもしれないけど，みんなで誘って挙げた手は気持ちがいいものです。みんなで手を挙げるのもいいかもしれませんね！がんばれ！

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

♪♯ 新・ひとり・ゴメッ ♪♭

◆この３回ずっと連載してきた「女性たちの『生きる』闘い」ですが，何度も読み返すたびに「遠くのお話じゃない。こんな状況はうちの学校・町にもあるなぁ。」とじんわり思えるのです。そう思うと，他人事じゃなくなってくるんですね。もしかすると，それはあなたのクラスの，またはあなた自身のことかもしれません。あらためてじっくり読んでみてください。　◆来週の月曜日は「学習会解放子ども会」の日です。学習会一夜研修が３日に行われましたが，その流れで楽しくやっていくので，関心のあるみなさんは誘い合ってぜひ参加してくださいね！　◆あくる火曜日「奨学金申請書類

作成会」を放課後大会議室で行いますが，みなさんは奨学金のことについてどのくらい知っていますか？３年生はもう学習していると思いますが，奨学金にはいろんな種類があるんですよ。１・２年生も関心を持って先生の話を聞いておいてくださいね！

◊ これからの日程 ◊◊ ◊ ★☆☆ ★★★ ☆☆☆☆ ★★★ ☆☆★

２月23日(金)　２年生全体学習⇒２年生最後の全体学習。今の精一杯の勇気を振り絞ろう！
26日(月)　学習会解放子ども会(16:30～；総合センター)⇒誘い合ってみんなで行こう！
27日(火)　奨学金申請書類作成会(16:10～；大会議室)
28日(水)・３月１日(木)　１年生全体学習⇒最後の全体学習で，１年間を振り返ろう！
３月７日(水)～９日(金)　１・２年生学年末テスト
８日(木)・９日(金)　徳島県公立高校入学試験
10日(土)・11日(日)　学習会宿泊研修(３年生を送る会・閉講式)⇒過去最高の参加に挑戦し，学習しよう！
13日(火)　卒業式
16日(金)　徳島県公立高校入学試験合格発表
23日(金)　2000年度終了式

女性たちの「生きる」闘い ④

夫の実家との闘い

〈ひとくくりに見ないで〉

再びAさんのケースに戻ろう。

結婚した後も、彼の両親の言葉は、彼女の神経を逆なでしていった。

「彼の実家の地域でお祭りがあって、実家に行ったんです。その時、義母さんが『あんたの育ったO地区では、こんなことはしてないよね』って何かに付けてO地区はっていう、地区に対する偏見が出てくるんです。」

祭りの風習から、食事の段取り一つをとっても、義母は「X地区ではこんなことはしてんないよね……。」と言い続けた。その言葉の端々には、彼女の育った部落に対する偏見が漂っていた。彼女は、ある時たまらなくなって義母に抗議した。

「『義母さん、私のこと、X地区だからって言うのは止めて欲しいんです。X地区にもいろんな人間がいます。豆腐を大きく切る人間もいれば、小さく切る人間もいる。だから、ひとくくりに考えないで欲しいんです。X地区が私ではなくて、私がたまたまX地区にいただけの話ですから』ってて。」

「X地区だから……」と繰り返す義母。その言葉が、どれほど彼女を傷つけていたのか。義母には全くわかっていない。

「義母に、そう言ったんだけど、『悪気はないんよ』って。その一言だけでした。やっぱり、理解してもらってないですよね。」

この義母さんだけではない。多くの地区外の人間は、自分が部落差別を侵していても、その自覚は、ほとんどない。極めて何気なく、まるで当たり前のことの様に、差別をしていく。そのことが、どれほど相手を傷つけているかなどとは、想像さえしていない。

〈自然に接していきたい〉

彼の両親との闘いは、まだ始まったばかりだという。

「今こうやって、夫も子どもも私と一緒に解放運動してるけど、そのことは、彼の実家の両親は知らないんです。私、今はそれでいいと思ってます。」

こう彼女は言い切る。自分たちが家族で「部落差別」と闘っていること。そのことを、彼の実家の両親に今、わざわざ言う必要はないとも言う。何故か。

「そのうち、子どもが自分の口で『僕、解放運動しよるんじゃ』って言うた時に、『そうよね』って明るく言うてやろうと思って。その日を心待ちにしよるんです。夫にも言ってるんですよ、そ知らぬ顔して『なかなかおもしろいで』って。そう言う感じで言ってよねって。」

それは、彼女のこだわりでもある。小さいころから受けて来た部落差別。彼女にとってそれは、暗くて重たい体験だった。彼女の受けた差別の傷は大きい。だからこそ、今、家族の中で部落差別を語る時、「明るく」「気負わずに」「自然に」話していきたいと語る。

「それこそ、私が体験したように、わざわざどこかに呼んで『実は君は部落なんだ』っていう、あのフレーズは、もうナンセンスですよね。子どももイヤだし、親もイヤでしょう。別に悪いことやってるわけじゃなし。あくまでも、気負わずに、自然にいきたいと思ってます。」

そう語るAさん。彼女は、部落差別の根っこの深さも知り尽くしている。だからこそ、こう考えるのだ。

「たぶん、今、わざわざ義母さんに話をしても、きっと受け入れてはもらえないでしょう。それどころか、『うちの孫は部落じゃない』って。そういう言い方されるのが、目に見えてますから。」

彼女は、実家の義母たちが持つ、根強い部落差別の目を見抜いている。だからこそ「義母たちがあきれるほど、あっけらかんと自然にしていたい」と語る。

子どもとの闘い

〈部落の親の願い〉

彼女には、二人の小さい子どもがいる。子育ては、彼女にとって解放運動そのものだ。子どもたちの存在が、彼女を解放運動へと奮い立たせる。彼女のエネルギーの源と言っても過言ではない。

「私は子どもに、部落差別を教えるのに、それこそ構えるんじゃなくて、ご飯食べながらとか、お風呂に入りながらとか、寝る前に話をしたり。子どもが、自然に部落について考える、そういう環境を作りたかったんです。私の経験したような暗くて重たい部落差別との出合いを、自分の子どもにはさせたくなかったんです。」

彼女は子育てをする上で、子どもが、あくまでも「自然に」部落差別を理解するように極力気を使ってきた。自分が受けた部落差別を子どもにだけは経験させたくない。それは、被差別部落に生まれた親が持つ、子どもへの切なる「思い」である。自分が体験した部落差別。それが、厳しければ厳しいほど、その「思い」は強い。彼女もまた、その強い「思い」を抱えた親の一人である。

〈何もしなければ、差別はなくならない〉

彼女は、子どもに「部落差別がある」ということを、自分の言葉で、七転八倒しながら教えていった。「解放子ども会」に入れる時も、彼女なりに、子どもの様子を気にかけながら話をした。

「『最初は、遊ぶだけでいいから。難しい話がわからんかったら、帰ってから母さんが話をしてあげる。だから、ちょっとずつ子ども会に顔を出してみようよ。』そう言うて、子どもに話をしました。」

彼女にしてみれば、子どもには、自分の言葉で明るく話をしていたつもりだった。しかし、子どもの反応は、そんな彼女の気持ちとは裏腹に冷めていた。

「僕が部落じゃなかったら、こんなのにこんで友達と遊べたのに…。」

息子のこの言葉は、内心ショックだったという。しかし、その青葉に、ひるんではいられない。彼女は、彼にたたみかけた。

「『それは確かにそうじゃ。母さんも、子どもの頃あんたと同じこと考えよった。けど何もせんかったら、差別は無くならずにずっと残って行くんよ』って話をして。」

差別さえなければこの子にこんな思いをさせることもない。そう思うと無償に悔しかった。

しかし、その一方で、部落差別の厳しさは、母親である自分は知り尽くしている。だからこそ、子どもが差別に負けないために、小さなうちから鍛えておかねば。Aさんは、息子の「甘え」た言葉にひるんでなどいられなかった。

〈みんなで運動しよう〉

彼女は自分の育った地区のことを、子どもに伝えている。

「子どもを実家に連れて行った時、息子が『川向こうって何』って聞いたんです。『それはね、母さんの育ったX地区を見てごらん。川がこうあって、橋があって、こっからこっちがY地区。こっからこっちがX地区。こういうふうに、橋の向こう側に『部落』があったけえ、普は『部落』のことを『川向こう』って言うたんよ…。」

彼女は、そう息子に説明しながら、自分が子どもの頃受けた被差別体験を思い出していた。目の前には、彼女の育ったO地区が見える。今、彼女は自分の息子に「部落差別」を教えている。

「『世の中には部落差別があって、だから、こうやって運動して、差別はだんだんなくなって来たんよ。でも、残念だけど、まだ、差別はいっぱいある。じゃけえ、母さんも父さんも、おっちゃんもおばちゃんも、みんなで運動しよるんよ。』って言う話をして…。」

子どもに「部落差別」を教えること。それは、部落の親にとって、ウルトラCを要求される事柄と言っても、過言ではあるまい。自分にも、子どもにも全く責任のないところで一方的に「差別」を受ける。そのことを親の立場で、どう説明しろというのか。出来ることなら、子どもに、わざわざ話したくない。その一言につきる。子どもに「部落差別」を教えるということは、部落の親にとって、一番シンドいことの一つなのだ。そのシンドさを乗り越えるために、Aさんは「解放運動」を息子に語る。そうすることで、「部落差別と闘うこと」を息子に伝えていく。

次号につづく